

「賀古駅家、発掘ものがたり」 5 <駅家を示す出土品>

古代山陽道の場所はほぼ決まりました。次は「賀古駅家はどこなのか」です。

そこで、2つめの研究、出土品からの研究では、どのようなことがわかっているのでしょうか。この研究には今里幾次氏の業績があげられます。

氏は播磨の各地から見つけている瓦に注目しました。瓦は遺跡から大量に見つかるため比較検討がしやすいという特徴があります。発掘しなくても地表面から採集できるということも大きな強みです。氏は播磨各地から見つけた瓦を検討し、古代播磨の役所である播磨国府の下で制作された瓦を抽出することに成功しました。氏はこれを「播磨国府系瓦」と命名されました。

播磨国府系瓦は現在8種類が確認されています。そして、この播磨国府系瓦が古代山陽道に沿って一定間隔で見つかることから、この種の瓦こそが古代の駅家に葺かれていた瓦であることをつきとめられました。

これまで、古代の瓦が見つかる場所は寺院跡であるとして「〇〇廃寺」と呼ばれていました。事実、現在賀古駅家と推定されている大歳神社周辺も「古大内廃寺」と呼ばれていましたが、氏の研究の結果、寺跡ではなく瓦葺きの駅家跡であると判明しました。

古代山陽道と播磨国府系瓦、この2つの研究が通称「古大内廃寺」だった遺跡を「賀古駅家」へと導いていったのです。

